みづゑ　第六十二

明治四十三年五月三日發兌

美術談叢

キレイナ畫キタナイ畫

石川欽一郎

畫は綺麗にかくのが良いか。又キタナイ畫でも差支へないものかとの疑問は能く研究家から聞くことなるが。之が返答は誠に六かしい。綺麗な畫にも種々あり。キタナイ畫にも種々ある。輸出向水彩畫に見る如き素人受一方と云ふ綺麗なのもあれば。又其反對に。黑人筋丈には向くが素人には一向面白くないため。毎も展覽會では賣れた例なしと云ふキタナイ畫もある。そこで私は此キレイ。キタナイの問題は。研究家としては毫も念頭に浮べないでよいものであると考へるのです。キレイに畫いて觀衆の注意を引かんなど云ふ野心ありての作品ならば。其考案が既に最初から非美術家的なるが故に。此の如き作品は高潔の趣を缺かざるを得ないことゝなるも不思儀はない。畫に俗氣があると云ふは此處のことで。上手な畫にも俗臭あるあり。下手な畫にも高尚なるがある如く。キレイナ畫必ずしも良からず。キタナイ畫必ずしも斥く可からず。例へば和歌の先生が教ゆる處は。何んでも思ふ通りを素直に紛飾せずして述べたるが歌として最も良しとて。古來名歌にも其例尠なからざることを克く談し聞かさるゝとの事なり。私は歌の方は一向盲目なるが。畫の方から考へて之は成程と思ふなり。畫家が我感興により其儘を現はしたる作品は。誠に自然に出でたるものにして。配色筆勢。一見愚なるが如くにして反て敏なるものあるは。研究家諸君の夙に經驗されたる處と信ずる次第なるが。此の如き作品に對しては。綺麗キタナイの迂評を挿むべき餘地なく。凡て現はれ

たる通りの其儘にて人を樂ましむるものなり。之が研究家の目差すべき點にして。要するに作畫の動機が既に鄙野ならば。如何にキレイ上手なりとも俗氣耐へ難かるべく。若し又キレイ上手なるが上に畫家の心氣高潔なる作品ならんには。美は彌々美にして麗倍々麗ならんこと。朝日に匂ふ山櫻の如く其美は愛すべく其品は侵す可からざるものあらん。

元來畫と云ふものは人が見て樂しむものなる故。キレイなるが本當にて。強いてキタナイ畫をかくにも當らざることながら。キレイな畫は惡るくすると俗に流れたがるものなれば。キタナイ方が先つ高尙らしく見ゆるとは云はるゝなり。併し之は姑息なる消極的の考へにして。無論一般に通用するものには非らず。蓋し畫に限らず。凡そ人世の心がけとしても。自然の儘なるが最上の美にして。紛飾せる技巧の美は。其實は大の醜なること僞りなき處なれば。研究家諸君は只此心得を以て。平氣に我本領の自然を發揮することを專一と爲されなば。綺麗な畫の出來ることもあらん。キタナイ畫の出來ることもあるべし。そんな事には無頓着に。唯高潔なる心氣を以て。上手になることのみを心がけらるべし。」

ラスキンの山岳論〔六〕

小島烏水

それから、高山性の山岳、低山性の山岳、山巒、となつて山の實相を講じてゐます、あまり長くなるから、こゝには山岳の雪が、如何に多く畫家に、忘られてゐたかといふ點に就いて、述べてあることを、御話いたしませう。

山岳の形體を、考察することは、勿論必要であるが、高山には、所謂萬年雪と稱して、消えない雪がある、その不斷の雪のために、山形が幾分か變化してゐることを、認めなければならぬ、冬景色の畫は、月夜の風景畫と同じく、有り觸れてゐるが、ラスキンに依ると、ハントや、デ、ウインントの作品に、やゝ見るべきものを認めた外、まるで不可(いけな)い。